

すもう と わたし

副校長 遠藤 久利

小学校の高学年の頃は、休み時間になるのがとても楽しみだった。真っ先に運動場に出て、靴先で地面に大きな円を描く。そして、数人の仲間がやってくるのを待っている。わたしのしこ名は、「若乃花」。他にも「栃錦」や「朝潮」、そうそう、「明武谷」もいた。それぞれが、自分のお気に入りの力士を名のり、すもうをとるのだ。毎日、毎日飽きもせず、すもうをとるのだ。ベルト通しは引きちぎられ、腰の辺りは爪のひっかき傷が絶えることはなかった。それでも、卒業するまでやめることはなかった。

高校に入り、また相撲との出会いが待っていた。当時、相撲は国技とは言え、マイナーなスポーツで部員が少なく、入部してすぐにレギュラーになった。授業が終わると、部室へ直行し、まわしを締めてすぐに稽古が始まる。週に一回は、必ず、大学に進んだ先輩が来て、稽古をつけてくれた。運動する者にとって一番怖いのは、大きな怪我で選手生命が絶たれることだ。そのためには、「しこ」や「てっぽう」、「摺り足」そして柔軟性を高めるための「股割り」等、基本練習の他に、上手に投げられるようになること、上手に押されるようになること、つまり「受け身」の練習を繰り返しやった。そのおかげで、一度も大きな怪我をすることがなかった。

様々な大会にも出場することができ、全国を巡り、多くの人と親交を深めることができた。今でこそもうないが、大学時代までは、あの時の試合の立ち会いで、こうしていればとか、上手を切ってからでればよかったとか、よく夜中に目が覚めることがあった。

ところで、今、運動場ですもうをとって遊んでいる子を見かけたことはありません。もしかしたら、NHKの大相撲を見ている子もいないかもしれません。わたしが、教師になりたてのころは、よく、子どもと一緒にすもうをとったものでした。

たしか、体育の授業でも「いいか、これが本当のしこだ。」なんて言って、準備運動がわりに一緒に「しこ」をふんだこともありました。

さて、前回の五月場所は、大関白鵬の全勝優勝で幕を閉じました。若貴が引退し、一挙に相撲人気は下降傾向にある相撲界。どんどん力士は大型化し、けがをして休場する力士がいっこうに減らない相撲界、みんな同じような体型をしていて、だんだん、相撲の醍醐味が失われつつあるように感じます。白鵬関には、自分の個性を十分に発揮し、ご本人も言うておられるように「みんなに好かれる横綱」になってほしいと相撲好きの一ファンとして応援していきたいと思っています。